

特 116

333

釋迦傳



始



子116
333



目次

第 一 章	第 二 章	第 三 章	第 四 章	第 一 章	第 二 章	第 三 章	第 四 章	第 一 章	第 二 章	第 三 章	第 四 章	第 一 章	第 二 章	第 三 章	第 四 章	
序	釋迦族の由來	印度の四姓	瞿曇族	釋迦族	釋迦氏の勃興	王家樂行の太子	釋尊の降誕	太子修學	太子立妃	太子厭世	出家苦行の太子	太子の出家	太子の苦行	太子菩提樹下の誓願	太子降魔	太子正覺

大正
12. 4 24
内交

第五章

成道以後の釋尊

- 第一節 釋尊初轉法輪
- 第二節 四聖諦
- 第三節 八正道
- 第四節 六度
- 第五節 六羅漢
- 第六節 三寶
- 第七節 五蘊
- 第八節 十二因緣
- 第九節 惑業苦の三道
- 第十節 業力所感の四別
- 第十一節 耶舍等の得度
- 第十二節 三迦葉の歸佛
- 第十三節 竹林精舍
- 第十四節 精舍の教化
- 第十五節 十二頭陀行
- 第十六節 祇園精舍
- 第十七節 佛弟子の制戒

第六章

釋迦氏一族の教化

第七章

釋尊最後の教化

- 第一節 釋尊父王教化
- 第二節 阿那律の得度
- 第三節 女人得度
- 第四節 小乗の徒
- 第五節 大乘の徒
- 第一節 十二分經
- 第二節 釋尊最後の教化
- 第三節 須跋多羅の教化
- 第四節 釋尊入滅
- 第五節 佛舍利の分與

第八章

釋尊入滅後の佛教

- 第一節 佛典第一結集
- 第二節 佛典第二結集

佛 陀 禮 拜

佛陀の御名を聞くからに

邪道の怖畏より護らるる

たのみをかくれは一切の

願望を究竟に満てたまふ

教勅の如く行はば

三身得せしめ賜はるゝ

教祖釋迦牟尼如來に

禮拜恭敬してたてまつる

序 說

一切衆生の菩提の爲に

無上道心起し給ひて

福智二聚の力に依り

惡魔を下して成佛し給ひて

解脱の道に有縁者等を

導き給ふに巧みなる

人天の導師と法王子に

共に禮拜す吉祥賜はれよ

老いたる人も若者も

學者も愚者も其耳は

鹿が叫ぶこへぐの

いろくくに響く快さに

我を忘れて捕へらる

其聲作れる歴史家は

社會の表に美なるため

彼等は學者と云はるれども

或は歴史は支離滅裂

眞實の精を失へり

或は省略多き爲め

意義を少ししれ故に

佛陀の道のその歴史

法王外護者の顯はれて

次第を説く可しきさらば

注意して聽け諸人よ

釋迦傳

第一章 序論

現今都と云はず、田舎と云はず、人家相連る所、其處には堂塔の影を見ざるなく、鶏犬の相戯るゝ所、其處には梵鐘の聲を聞かざるはなく、日本中津々浦々野の末山の端に到るとも、寺院の設けあらざるはなく、佛像の安置せざる所はなきなり。

嘗に日本のみならず、支那印度に於ても、吾人は寺院を見、佛像を見るなり、其は何の爲めなりや、云ふまでもなく其地方の人々の信仰心に基くものにして、これによりて精神の安慰、人生の不安を醫するに外ならざるなり。

人間は自然に宗教を求むる情性あり、何れの國何れの所と雖も、苟も人類の生存し居る所にして、宗教のなき所はあらざるなり。

勿論其の神なり佛なりと、差別はあれども、自己以上の力あるものとして、何物か崇拜せざるはなきなり。

されば、一般宗教を二種に區別して、自然教と顯示教とす。人類自然の要求に出でて、別にこれを傳へたる教主とか教祖なきを自然教とし、教祖とか教主あ

りて之を主唱し傳道したるを顯示教となす。故に彼の野蠻時代に行はれたる宗教は多く自然教に屬するものなり。今日文明國に行はれたる宗教は皆を此の顯示教なり。

就中、佛教と共に、世界の三大宗教と云はるる、耶蘇教回々教は、共に立派なる教主を有すなり。

即ち回々教は、西歷五百七十年アラビヤのメッカに生れたる、偉人マホメットに依りて唱導せられ、耶蘇教は一千九百有餘年の昔（マホメットに先つこと五百七十年）猶太の國ガラリヤに生れたる、イエス、クリストによりて傳道せられたり。我が佛教も亦これ等の宗教と同トく教主を有するなり、其は即ちクリストに先つ事五百年、即ち印度に降誕せられたる釋迦牟尼佛は、一切衆生の悲むべからざるに悲み、喜ぶ可からざるに喜び、迷ふ可からざるに迷ふを憐れみて、宇宙の眞理を示し、人生の妙趣を説き、人類をして其依る可き所を教へ、行ふ可き道を示されたるなり。

如此、世界三大宗教に於ても、教主のことなる如く其の教法も亦色々に分れ、佛教に於ては經典も回々教のコーラン經とか、耶蘇教のバイブルの如き簡單なるものには非ざるなり、實に五千七百餘卷の多きに及びり。

故に之れを開けは天地六合に洽く、之れを卷けは一指に盡すと云ふが佛教の特色なり。

其が佛教の教主釋迦牟尼佛は、如何なる系統にして、如何にして出家せられしか次第に述べんとす。

第二章 釋迦族の由來

第一節 印度の四姓

印度民族には、古來四姓の階級別ありて、門閥を以て尊卑を分ち、種族に於て上下階級を隔つ事は、同ト人類にありながら非常に厳しく、我が日本の維新前の士、農、工、商の差別の如きにあらざりしなり。

其の第一種姓を刹帝利と云ふ、王公種族なり。武を講ト兵を練りて外敵を防ぎ國民を統治するを其任とす。

第二の種族を婆羅門と云ふ、僧侶種族なり、聖道を守り淨行を修して、宗教並に教育の事を司るなり。

第三の種姓を毘舍と云ふ、商工種族なり、貿易販賣の業を営み又は技術工藝を職とす。

第四の種姓を首陀羅と云ふ、農牧種族なり、農業牧畜の労働に従事し多くは奴

隸其他の賤役に服す。

此の四姓は互に婚嫁を通せず、嚴然一社會を成して言語も交へぬ位なり、此の如き四姓階級を打破して印度の社會組織に一變化を與へたるは、我が教主大聖釋迦牟尼佛なり。



佛教の教主釋迦牟尼佛は、四姓中の第一に位する刹帝利族姓中の一族、釋迦氏より出づ、釋迦氏又は瞿曇氏、甘蔗氏、日種氏等の別稱あり、これ同一釋迦種族の異名なり。

第二節 瞿曇種族

古傳に云く、太古の時、茅草と稱する國王あり、晩年に及ぶも尙ほ嗣子を得ざりしかば、終に王位を捨て、山中に遁れ、瞿曇と云へる山人に就て道を學び、小瞿曇の號を得たりしが、年漸く老ひて歩行自由ならず、僅かに弟子等の看護に依りて、餘生を送ることなれり。

其弟子一日飯食を得んとして他に出るに當り、老師の野獸に害せられんことを恐れて、草籠に入れて之を樹上に懸け置きたり、然るに獵師遙かに之を見て白鳥ならんと考へ直に之を射殺せり。

弟子等還り來たりて大いに驚き、悲泣哀惜して其死骸を擁してありしが、老師の血滴り落ちて、地上に凝結せしものより、二莖の甘蔗を生じ、漸次日光の炎熱を享け、其莖開裂して一莖よりは男子を生じ、一莖よりは女子を生せり。弟子等之を保育し以て國人に報ず、國人皆謂て之を王種となし、乃ち男子を善生と名け女子を善賢と名け、其成長を俟て男子善生に王位を嗣がらしめ、女の善賢を之が正妃と爲したり。而して此の王も甘蔗より生じられたれば、即ち名けて甘蔗王と稱し、又日炎に依りて生じたるを以て日種氏と呼びたり。

釋迦種族は即ち其後裔に屬するを以て、瞿曇氏と云ひ、甘蔗氏と云ひ、又日種氏と稱す。而して其系統を以て之を分ては釋迦は即ち支族の出なるなり。

第三節 釋迦族

甘蔗王の正妃善賢一男を生む、之を長壽と名く、次妃も亦四男を生む其長子を矩面と名け、次子を金色と名け、第三子を象衆と名け、第四子を別成と名く。善賢妃は、其子長壽を立てんとして、次妃所出の四子を憎むこと酷しく、王に

讒して之を國外に放逐す。四子逃れて雪山の北方に至り、直樹林に居を構へて住す。而して未だ數年ならずして鬱然として、一大強國を成すに至れり、父の甘蔗王之を聞て、自ら其前非を悔ひ、屢々使を遣はして復歸を促せしむ、固辭して終に還らざりき、父王之を歎して曰く「我子は釋迦なり」と。釋迦は能仁と譯す、蓋し仁德以て國を治むるを頌せしなり。

是よりして此一族を名けて釋迦氏と稱す。又此一族は雪山北部の直樹林に住するを以て、即ち國名を舍夷(直樹林の義)と號し、更らに國名を以て氏族を呼び、亦即ち舍夷氏と稱せり。

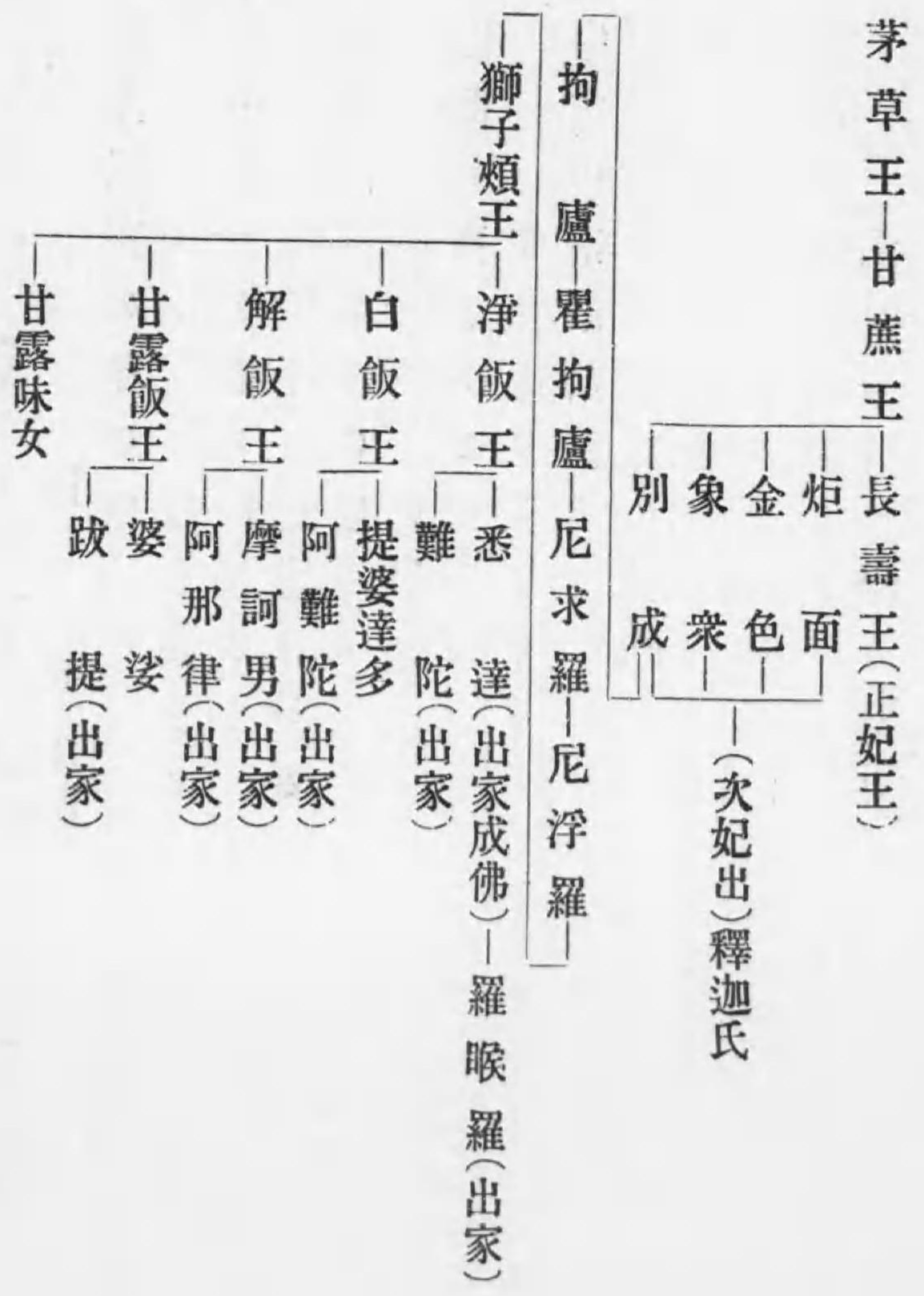
第四節 釋迦の勃興

釋迦氏の末弟別成王の子を拘廬王と稱す、拘廬王四世の孫を師子頰王となす師子頰王の時國漸く強大となり、王城を迦毘羅衛(中印度)の地に築きて、大に四隣を威壓せり。

師子頰王四男一女を生む、長を淨飯(又は自淨)王と云ひ、次を白飯王と云、三を斛飯王と云ひ、四を甘露飯王と云ひ、女を甘露味と名く、淨飯王二子あり、長子を悉達と稱し、次子を難陀と名く、悉達は即ち釋迦牟尼の本名なり。白飯王も亦二子あり、長を提婆達多(又は調達)と云ひ、次を阿難陀と云ふ。

斛飯王も亦摩阿男、阿那律の二子を生み、甘露飯王も婆娑、跋提の二子を生めり。
 釋迦一族の繁榮想見すべきなり。此等諸王は淨飯王を中堅として皆迦毘羅衛國に住居せり。
 淨飯王の治世は、實に釋迦氏全盛時代にして、金殿玉閣天下の壯觀を極め、榮華の快樂は百代不磨の想をなさしめたり。
 釋迦牟尼世尊は、斯る榮耀極りなき王家に生れ、百事皆意の如くならざるなき身なるに拘らず、其の榮華の快樂は反つて釋迦をして、如露亦如電の思ひを起さしめ、諸行無常の世相は、驅て以て出家求道を促し、進んで佛陀を成せずんは熄さらしめたり。
 果せる哉。王家は淨飯王歿後幾年ならずして、隣國と難を構へ、一族悉く滅亡に歸し終り。

釋迦の家系



第三章 王家樂行の太子

第一節 釋尊の降誕

(慧海)

藍毘尼苑の朝の空
 天上天下唯我獨尊と
 心性獨立の實を叫はれし
 雄勢今も此處に見る
 藍毘尼苑の朝の空
 赫々耀々の旭光は
 雲間に高さひまらやの
 銀光殿を照すなり
 宇宙の莊嚴具足する
 世界の最高の雪峰は
 東の空の雪の上
 おほろに光れり西北には
 歡喜ヶ嶽に輝けり
 北の空には巍々堂々

寰宇を斷破す妙莊嚴

最勝光を待つ如く眞白雪嶽の眞光は

解脱雪嶺聖靈峰

朝日に如來の光輝待つ

無名の雪の峰々は

嗟呼釋尊の生れ給ひし

藍毘尼苑

宏壯絶大の妙光は

佛日の光輝によりて増す

法の光りながれ盡きせず

大聖釋迦牟尼世尊は今を距ること、大凡二千五百年の往古、中印度迦毘羅衛國

釋迦氏の王宮に降誕せられたり。

釋尊は幼名を薩婆悉達と稱せり、父は即ち淨飯王にして四民の上に君臨し、母

は同族善覺の女、摩耶夫人と稱して賢徳の名高かりき。

一五

摩耶夫人懷妊して、既に臨月に近づきければ、其の父善覺は、妊婦を吾が藍毘尼園に迎ひ取りて、父子の情を盡さんことを王に請ひ、夫人は即ち藍毘尼園に移居せり。

四月八日の曉天、偶々庭園に出で無憂樹の花を見、其一枝を手折らんとして、頓かに産氣を催し王子を分娩す、是即ち大聖釋迦牟尼世尊の世に始めて現はれ給へるなり。

釋尊の降誕あるや、瑞祥四面に満ち、天は甘露を雨らしめて、偉人の出現を祝するものゝ如く。又身體には大聖の相好を圓滿し、而して自ら行くこと七歩にして、右手を舉げ、「天上天下唯我獨尊」と、獅子吼せられたりと云ふ。

斯る奇瑞吉祥の中に出誕せられたれば、父母は即ち之れに薩婆悉達（一切義成就と譯す）と命名す。而して摩耶夫人は産後七日を経て、俄かに歿せられたりかば、姨母（夫人の妹）摩訶婆闍波提に乳養せられて成長せられたり。

「備考、偕て釋尊降誕の年代に就き色々異説ありて一定せざるも、今より二千八百餘年の昔なりと、古來より支那、日本に言はれし説なり。

然るに西洋學者の廣く認むるは、今より二千三百餘年前、西曆紀元前六百年位なりとす。

其れは印度に於て歴史の完全たるものなきなり、正確なる事を論ト得ざるなり、故に二三釋尊年代に就て參考を舉げて評せんとす。

近時歐洲の學者の研究せしものと、南方佛教徒の傳ふるものと、又北方佛教所傳中の、衆聖點記に云へる所とを比較し、更に支那唐初の玄奘西遊年代と、印度の護法戒賢二師出生の年代とを合せ來りて、之を考ふれば略ぼ年代の相合する有り。隨ひてその實を得るに於て、敢て難きにあらず、今姑く衆聖點記を應用すれば、釋尊は支那の周の靈王九年に生れ、同トく周敬王二十五年に歿せり、故に日本及び西洋の紀元を以て之を算すれば釋尊の降誕は。

日本紀元後九十八年（二千四百八十五年大、十二）

西曆紀元前五百六十三年

に當るなり、故に之れを先づ正當となす可き也、偕月日に就ても異説あるも四月八日となすを正しき様に考へらるなり。

第二節 太子修學

悉達太子、年甫めて七歳にして、碩學毘舍多羅を師として初めて書を學び給ふ師に問ふて曰く「書に幾種ありや」師逡巡して答へず、悉達自ら言ふ「天下の書に六十四種あり」と。

毘舍多羅驚歎して、淨飯王に白して曰く「太子は是れ人天の大師なり、何ぞ吾教授を俟たん」と。

王之を聞て歎喜措く能はず、新に學園を開きて諸種の學藝を修めしめ、又忍天なる者を擧げて兵法の師となし、同族五百家の兒童を以て其學友として、文武兩道を磨かしめたり。

一日學友等と俱に庭園に在りて、射術を演習しつゝありし時、提婆達多其園内に一雁を射落したり、悉達之を攝取して取返さしむ、悉達報して曰く。

「我已に此雁を攝取す、我本來一切衆生を攝受せんと誓へり、今や斯の窮鳥にして我に屬せざらんや」と。提婆是より怨を結んで遂に競争心を發せりと云ふ。又一日武藝を外園に試みんとして出城せしに、巨象の城門に當て佇立するあり、提婆之を見て即ち手を擧げて其頭を搏たたるに、象は地に仆れて通路を杜塞せり。難陀(悉達の異母弟)即ち足を以て象を漸く路傍に倚らしめたるも、通路は尙ほ不充分なりければ、悉達太子自ら手を以て象を誘致し城門外に退去せしめたり。

斯くて演武場に着するや、提婆先づ弓を執て鏡鼓三重射徹せり、次に難陀も亦其三鼓を徹す。悉達太子は、其弓の彈力尙ほ弱きを以て、祖王傳來の良弓を寶庫より取り來たり、一箭を放つて七鼓を貫徹し、尙ほ其力餘りて箭は地を穿ちて深く入りたり。悉達太子は、其の文藝に於ても、武藝に於ても、實に非凡拔群なりしなり。

第三節 太子立妃

悉達太子年方に十五歳、父王は一族群臣を王宮に會して立太子の式を行ひ、十七歳の時に至り妃を娶らしむ。初め太子の降誕あるや、占相師私陀をして、之を相せしめに、元來太子は三十二相八十種好の瑞相なれば、驚きて云々「在家なれば轉輪王」「世界の聖王」たる可く、若し出家せば當に一切智を成すべしと占卜す。

父王は大に喜ぶと同時に亦竊かに、其出家遁世せんことを憂懼せり。是を以て多數の采女をして常に殿中に宿衛せしめ、又兵士を以て城門を警固したり。太子は性沈痛にして、其志出家遁世にありしなり。故に其の成長と俱に、父王不安の念は、一層深さを加ふるものありき。是に於て乃ち同族の梵志、摩訶那摩の一女耶輸陀羅を迎へて太子の妃となし、又瞿夷鹿野の二妃をも納れたり。而して尙ほ太子の心情を抑留せんとして、三妃の爲めに三時の宮殿を築きて氣候の變ずる毎に、太子の居を移さしめて、物に榮落あるの状を知らしめず、花

の如き宮女と、音楽技藝に秀でたる伶人などを侍せしめて、人生に少しの不快あることを知らしめず、以て太子をして出家の志を出さしめざる事に力めたり。されど太子の意志は、遂に是が爲に繋がれざるのみならず、却て厭世の決心を促すの基とはなりたり。即ち此等の世間の娛樂は畢竟幻夢に過ぎざればなり。

第四節 太子の厭世

悉達太子は、三時の宮殿に於て、何の憂ふ可き事なく、又何の悲しむ可き事なく、人生の幸福は至らざるなきも、中宵人なきの時、太子は獨り人生門題に心を潜めて、哀心悶々として禁ず可らざるものあり。

咲く花も散る時有り、満てる月も虧くることあり、紅顔の宮女いつかは白髮の其の頭上にははらざる可きと。生死老病の世態を感ずては、出家求道の念止の難きものありき。

太子一日城外の園林に遊行せんとして、城の東門に出でたるに、一老翁の頭髮白く身體軀めるを見る。

『いかなる人かやせはて、』

元氣も威光も更になら

肉さへ血さへ枯れ果て、』

皮膚筋肉も骨に着き

頭髮白く齒は落ちて

その身は全く生氣なし

杖にすがりてよろ／＼と

歩める者はそも誰ぞや』

御者答へて曰く。彼は老いたれば其身體衰へ全く精力を失ひて苦めるなり太子曰く。

『かゝるためらは此人に

限れるかさはなくて

すべての人にもあることか

知らねばならト告げよかし』

他日又南門に出で、病者の身瘦せ、腹大にして自ら持する能はざるを見て。

『顔色青さめ肌膚は荒れ

五宮のはたらき鈍くして

呼吸の息もなし難く

手足は枯れて腹いたみ

苦しみ叫けんぞ己がせし
尿管の中に居るは誰ぞ』

御者答へて曰く、彼れは甚たしく病苦になやめるなり。太子曰く。

苦しき病氣がなくてさへ

うつせみの世は夢のうち

たはむれ遊ぶとトトきを

まして病氣の苦惱や

おそれのがるゝものありて

忍ぶに難きことなるを

観たる識者は如何にして

娯樂と歡び美女を戀ふ心生せん

更らに西門に出で、死人の輿行せられ、室家之を哭するを見る。

「床の上にて横たはる

人を見よかしかみはなく

頭上に土をふりかけて

彼を圍める人々は

いろくの事を云ひつゝも

悲歎に腦を打ちはたく

彼の運るゝ其人は

そもく誰ぞや告げよかし』

御者答へて曰く。彼は最早や復び父母妻子兄弟を見ること能はず、故に彼れの親族等の悲歎せるなり。太子曰く。

「老ひの苦しみ現はれん

何故常世にかはらざる

若き者とぞなり得ざる

千々の病氣は身を害し

苦しみなやめるいかなれば

無病の者となり得ざる

此に長く留まらず

いかなればにや學者等が

不死の生命を持ち得ざる

幸福歡樂たれもみな

受くるを願はん何に故に

たどひ老なく病氣なく見いたさざる

五蘊の身を持つ我々は

況してや常に老と死と

いかになまは脱がるべき

病氣の苦の輪は廻れるを

我は此等の苦を脱がる

車を返せやよ御者よ

道修めんと願ふなり

最後に北門に出で、沙門(修道者)の身に法服を着け、鉢を持ち、錫杖を執り、

通行するを見る。御者曰く。

「我が君彼は沙門とて

五欲の樂を振り棄て、

信實に心を正しつゝ

家を出でたるものにして

食を乞ひてぞ世を送る

修行者にこそあれ」

太子歡喜して云く。

「善くことを言ひたれ我れも又

眞の出家は識者等が

常に讚嘆し給へり

この業こそは自己をも

衣食も安く思想をも

安く過して不死滅の

果をは得られん」

悉達即ち又又宮に還り、自ら念言すらく「我れ先きに老病死苦あるを見、而して人常に之に逼惱せらるゝを恐れたりき、今比丘を見て我情を開悟し解脱の道を示す」と。

是に於て愈々世事を厭忌し、出家して自ら比丘となり、生老病死の四苦を解脱する、要道を求めんどの志望を懐くに至れり。

第四章 出家苦行の太子

第一節 太子出家

悉達太子、出家を志望し、未だ決行の機会を得ず、空しく歲月を送りしが、求道の念愈々止め難く、終に其の宿志を父王に陳べ具に語て曰く「恩愛集會は必ず離別の期あり、唯願くは我に出家求道を聽せ」と父王其の手を取り、涙を流して曰く、「國未だ嗣あらず、汝宜ろしく此の意を止むべし。會て之を阿志陀梵志に聞けり、汝は畢竟世に處するを樂む人にあらざること、汝若し一子を生めば、復必らずしも其の志に背違せ」と。

太子乃ち右手を伸べて、妃耶輸陀羅の腹を指し告げて曰く「却後六年汝當に男子を生むべし」と。

妃即ち懷妊を覺へたりと云ふ。其胎兒は即ち羅睺羅之れなり。

父淨飯王の意尙は太子の出家を欲せず、一層城門を嚴にして百方抑留の策を講じたり、されど太子の志は牢として拔く可からず、意竊に脱出を企圖せり。此の夜、耶輸陀羅三夢を見る、一に月墮ち、二に齒牙落ち、三に右臂を失ふ。

寢て太子に語る、太子諭して曰く「月猶ほ天に在り、齒又落ちず、臂も尙ほ存す此夢虚妄にして實にあらず」と。夜半靜まるの時刻を俟ち、私かに馬丁の車匿をして愛馬健陟を牽き來らしめ、車匿怪しむ止むるを制して、愛馬に鞭ち車匿を從へて城の北門より逃れ出たり。東行數十里にして、其曉天の頃には、既に藍摩國の婆伽婆仙人の苦行林に達せり。即ち馬より車匿に告て曰く「我れ既に國を捨て今や此の閑靜の地に來着せり、汝と健陟とは俱に王宮に歸る可し」と。車匿悲泣自ら勝へず、愛馬健陟も亦頭を垂れて太子の足をなめ、別れを惜むものゝ如し。

太子即ち寶劍を把り自ら鬚髮を剃除し、發願して曰く。

「願くは一切と共に煩惱及び習障を斷除せん」と。

時に一人の獵師、鹿皮の袈裟(壞色の粗布)を被て通行す、乃ち之に語て曰く「汝の着衣は是れ寂靜服なり、何ぞ之を着て罪行を爲すや、我れ今此の寶衣を以て汝と衣易せん」と。即ち寶衣を脱して獵者に與へ、而かして自ら袈裟を着せ

り。
是に於てか金殿に住し、寶衣を飾り、美味に飽きたる太子の身は、忽然として幣衣乞食の哀れなる一沙門の相に變り果たり。

『何人も生るゝ時は唯一人』

臨終の時もひとりにて

死に逝くぞかし此世にて

苦しむ時もひとりなる

六道輪廻の世の中は

おのれひとり其ほかに

友はあらどと知れよかし』

車匿之を見て涕泣悲咽し、健陟を牽て本路に還り去れり。

『参考太子出家の年齢に異説あり、僧伽羅刹所集經卷下には四十五年夏座の地名を擧げ、二十九出家六年苦行三十五歲成道して八十歲入滅と云ふ。八大靈塔名號の頌に曰く。

『二十九歲處王宮六年雪山修苦行云云。』

瑞應本起經、因果經等には十九歲出家と云へり、今諸經を考ふるに十七歲納妃

と云ひ、又十九歲とも云ふ、出家年齢も十九歲、二十五歲、二十九歲等の説あるも、十七歲納妃二十九歲出家に據る可きか。

第二節 太子の苦行

太子、既に出家落飾して沙門と成りたれば、即ち行て禁欲苦行者、婆伽婆仙人を訪ひ、問て曰く。『汝等苦行を修して何んの求むる所あらんとするや』仙人答へて曰く。『天に生せんと欲す』又問ふ。『汝等徒らに苦因を修し以て唯苦報を求むるのみ終に苦を離脱し能はず』と。斯の如く論議明旦に及び遂に彼れ苦行の畢竟生老病死解脱の正道にあらざるを看破し、即ち辭し去れり。

車匿、王宮に還りつふさに太子出家の事を報するや、父淨飯王は大いに驚き、再び其志を翻して王宮に復歸せしめんとし、老臣等を婆伽婆仙人の住所に遣りたり。されど太子已に去りし後なりしかば、更らに追跡して漸く一樹下に端坐思惟せる所に到り、即ち父王の意を傳へて、歸城を勧めしも、太子の道心甚だ堅固にして更らに動くの色なし。太子云く。

『我豈恩愛を知らんや、但生老病死の四患を以て苦となすのみ、解脱の道を得されば終に歩を返さど』と。父淨飯王も是に於て遂に斷念し、一族中の阿若憍陳如、十力迦葉、頰鞞、跋提、摩訶男俱利の五人は遣り、苦行を共にして潜

かに太子を護衛せしむ。斯くして太子は、北の方恒河を渡たりて摩揚陀國王舍城に出で國王頻婆娑羅王の、國財を抛て相奉せんとの請を付け、阿羅邏仙人の苦行處に赴けり。阿羅邏仙人も亦禁欲行者にして、其の所説略々婆伽婆仙人に異ならず。太子之と問答して、亦其の苦行が究竟の道にあらざるを知り、辭して去り、轉じて迦蘭の苦行所を訪ふ。是れ亦一も得る所なく、去て更らに鬱頭藍子を訪問し、暫時其の教を受けしも、到底此等の苦行は、終に太子の意を満足せしむる能はざりき。

是に於て、師に依て教を受くるも畢竟無益たるを知り、單獨苦行して、自ら解脱の道を求めんと決心せり。

即ち鬱頭藍子を辭して、尼連禪河の邊に至り、阿若憍陳如等、五人の住處なる伽闍山に入り、日に一麻一米を食し、以て僅かに精氣をあたへ、端坐思惟すること殆んど六年、身體の疲勞を顧みず、默然一心禪定六妙門を修練せり。六妙門とは一、數息。二、隨息。三、止。四、觀。五、還。六、淨。を云ふ。

阿若憍陳如等は、太子の斯の苦修練行の狀を父王に報告す。王乃ち太子の乳母及び耶輸陀羅とはかり、衣食の資具數百車を、車匿に宰領せしめ、以て太子に送れり。されど太子は悉く之を斥けて一も受くる所なかりき。

第三節 太子菩提樹下の誓願

悉達太子は、伽闍山に苦修練行すること六年、身體疲瘦し顔色憔悴、しほく昏迷して倒れらるゝに至り、殆ど危きに瀕せんとす、此時太子は思ひ給はく。

『道は惠解によりて成ト慧解は根に依りて成ず。根は食飯によりて補はる。食を斷つは道を得るの因にはあらず、我れ當に食を受けて道を成す可し』とて、乃ち起て尼連禪河の清水に浴して、先づ身體を洗淨し、難陀婆羅と云へる牧女の捧けし、牛乳を受食して、氣力全く回復したれば尼連禪河を渡り、西南佛陀伽耶の地に行き、畢鉢羅樹の下に於て、自ら發願して曰く『我若し道成らずんば必ず此の樹を去らト』と。時に一凡夫來り、淨軟草を以て、樹下の磐上に薦む、其の名を問へば吉祥なりと答ふ。

太子喜んで曰く『我れ不吉を破し以て吉祥を成す』と。

『吉祥ぐさをすみやかに

我れに與へよ今日こそは

この草我れに大いなる

用をなすなれ五蘊等と

共に住する大魔王を

降伏なして上妙の

寂滅菩提を成就せん」

即ち取て之を敷き、結跏趺座して以て自ら堅固不壞の金剛座を定め、誓て曰く
「我正覺を成ぜずんば決して此座を起たず」と。

第四節 太子降魔

太子の出家と共に、自ら苦行を共にして、太子を衛護しつゝありし、阿若憍陳
如等は、同僚五人の間に端なくも異論を起し、阿若憍陳如、十力迦葉の二人は
樂行是れ正道なりと主張し、頽轉、跋提、摩訶男俱利の三人は、苦行即ち淨因
なりと唱導し、兩者互に相譲らず、遂に二派に分れたり。而して樂行派の二人
は、太子の幣衣粗食に甘んじて苦行するを見て、自ら心に忍びずとなし、早く
既に退き去れり。

其の後太子全く苦行を棄て、牧女の牛乳を受食するや、苦行派の三人は太子狂
亂して、自ら志を失へりと謂て亦即ち捨て去れり。

太子は是れに毫も顧慮する所なく、一意修禪觀法を凝らしつゝありしが、此の
端座默念の間には、諸種の煩惱妄想は勢を逞ふして、太子の心中に起り、これ
を防ぎ、これを害せんとせり。

「此座に我身は枯るゝとも

骨肉皮膚のやぶるゝも

たとへ生命の終るとも

無量劫にも遇ひ難き

無上菩提を成ぜずば

此座を起たど動くまど」

其の状は恰も百千萬億無量の惡魔、或は猛獅の如く、或は暴虎の如く、或は鼓
を鳴らし、或は劍を執りて太子をして退轉せしめんとしたるも、誓心堅固なる
こと恰も金剛の如くなりしかば、惡魔の軍衆力盡きて降伏退散せり。

第五節 太子正覺を成ず

太子は、畢鉢羅樹下金剛座上に結跏趺坐して、「我れ一切種智を得ずんば此座
を去らど」とて、修禪觀法を凝らすこと一週日、惡魔已に退散して身心共に明
淨湛然なること海の如く、時に落日光りを停め、澄月映徹衆星燦爛たり、天空
寥廓四顧寂然、亦一塵の障ふものなし。是れ方に太子三十五歳の十二月七日夜
半の光景にして、其翌日末の頃に至り、霍然として大悟徹底せり。

「修福の結果福を得て

修福の人は何時にても
願望の總てを得らるなり

悪魔の王を降伏し
無上菩提を頓に得て

摩訶涅槃の寂滅の
不壞の樂をは成りけり

即ち茲に宇宙の大眞理を開見して、生老病死の四苦、解脱の無上道を證し、最勝正覺を成して佛陀の位を得、人天の大導師として、牟尼如來の號を受け、釋迦牟尼世尊と尊稱せらるゝ、極果に達したり。是を以て畢鉢羅樹を名けて菩提樹と稱するなり。

第四節 釋尊思惟方便

太子は、上求菩提の道已に成りたれば、更らに下化衆生の方便を開かざるべからず、即ち成道後第一週日は尙樹下の座を起たずして、默然として思惟せり。以爲らく『我所得の法は甚深にして解き難し唯佛と佛とのみ即ち能く之を知る、一切衆生は薄福にして鈍根なり、如何ぞ能く我所得の法を解し得んや、我寧ろ

涅槃に入らん哉』と。是の時に方り大梵天王、帝釋天神等、交々來りて説法を請ひて止まざりければ、默然として乃ち之を許諾せり。

『古來摩揭陀國に教はあれど

正しくもなく智も又汚れたり

されば甘露の法の門

開きたまへよ汚れなき

覺了の教を説き給ひ

牟尼世尊よ法燈を

かゝけて暗黒を照されよ

如來の旗を押したてよ

妙音説法の時いたる

法鼓打てよ獅子王の

一吼奮迅する如く

法説き給ひと請ひ奉る』

佛世尊は仰せ給はく。

『梵天王よ今我れは

萬行苦行の功を経て
總ての過惡を滅したる
微妙の法を世の爲に
執着なせる衆生に

説くとも善くは悟り得ト

されど衆生の機根萬差にして利鈍一ならず、如何なる善巧方便を以て彼等を化導すべきか、第二週日に於ては、即ち此の問題に就て思惟觀察せり。而かして第三週日に至り、漸く化導方便の端緒を得たり、謂く「我當に甘露の法門を開く可し、請ふ有縁の者より之を始めん」。而して誰人か先づ之れを聞く者ぞ、阿羅邏、迦邏蘭は已に命終し、鬻頭藍子も亦逝けり。唯阿若橋陳如等、今現に波羅那國鹿野園に在り、宜ろしく先づ彼等五人を濟度すべしと。即ち座を起て波羅那國に出發せられたり。

第五章 成道以後の釋尊

第一節 釋尊初轉法輪

『千萬大劫の修行經て

佛陀を成ト給ひたり

其法聽かんと願ふ者

今こそ時なれ速かに

法聽かん爲めいざ來たれよと

釋尊、成道後第四週日の初めには既に菩提樹下を去つて、波羅那の地にありしが、霖雨の爲に行乞を遮られ、無提水邊に座定すること一週日、未だ食を供養するものあらざりしが、偶々五百人の一商隊牛車を牽て通行するあり。

然るに雨水氾濫して、道路險惡牛車躓て動かす、是に於て商隊長提謂、波利の二人は樹神の冥助を請はんとして水邊に到りて、釋尊の禪坐せるを見て密麩を和して是に供養す、釋尊食を受けて先づ彼等の爲に天文地理曆數を教示し、人倫道德の道を授けたり、提謂、波利等は、人道教を聞き道德戒を受けて、人天の勝益を得たりき。

釋尊、成道後の第五週日の初めには水邊定を起て鹿野園に着せり、鹿野園は、往昔群鹿の棲息せし一樹林なりしが、當時國王日に一頭を獵獲して食膳に、供せり、一日牡鹿を獲て之を屠殺せんとしたるに、自ら其孕めるの故を以て、救命を乞ふ状を示すを見て大に哀情を起し、斷然獵を禁トて樹林を鹿群に施せりと云ふ。故に之を鹿野園又施鹿林と呼びなせり。阿若橋陳如等は曩に釋尊を捨

て後此の鹿野園に住せしが、釋尊已に來れるを聞きて内心甚た悦はず、互に相警めて決して作禮するなからん事を約したり。而して一度接見するに及び佛の圓滿なる相好、巍々たる態度を見、敬虔の禁ト難く、忽ちに制約を破りて作禮恭敬せり。釋尊即ち阿若憍陳如を始とし、遂次五人の爲に四聖諦八正道の法を説き、三十九法輪を轉トたり。是れ即ち成道後最初の説法なり。

第二節 四聖諦

四聖諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦を云ふなり。

- 一、苦諦。三界六道の世間生死の果報を苦と云ふ。
- 二、集諦。諸々の苦を招く所の原因を即ち集と云ふ。貪、瞋、痴の三毒を始とし、一切の煩惱これなり。
- 三、滅諦。煩惱業力を全く斷滅して更に苦果の生ぜざるを滅と云ふ。
- 四、道諦。涅槃滅諦に到達すべき修行の法則を道と云ふ。之に八種の法則あり。

以上四聖諦中第一、第二は世間の果及び因なり。第三第四は出世間の果及び因なり。

第三節 八正道

八正道とは、四聖諦の中にて道諦を修むる上に於て必要にして、之れを合する時は、佛教道德の綱領たる、戒、定、慧、の三學となり、開くときは即ち六度ともなり、八正道ともなるなり。

- 一、正見。四聖諦の道理を知り、正しき理を見る事にして、道を修るには正しき道理を知る可きなり。
 - 二、正思惟。即ち思惟して判斷をあやまらぬことなり。
 - 三、正語。虚偽の言語を離るゝことにして妄語、惡口、兩舌等の罪過を犯さる事なり。
 - 四、正業。殺生、偷盜、邪淫等の惡行を離る事なり。
 - 五、正命。多くの供養を受けん爲に出家の道をあやまらざるなり。
 - 六、正精進。僧行を勉勵するなり。
 - 七、正念。意を正しくなす事なり、乃ち心を正しくして獨りを能く慎むなり。
 - 八、正定。禪定を修する事なり、心の散亂せしめらるゝことを防ぐなり。
- 今此の八正道を三學に配當すれば、第一正見、第二正思惟、は慧(智慧を明らかにす)にして。第三正語、第四、五、六、七、は戒(行爲を正しくする)にして。

第八正定は定(心を靜める)に當る可きなり。要するに之れは修行者の自己修養の爲に先づ最初に説かれたり。進んでは釋尊は自利利他の六度の行をも説かれたり。

第四節 六度

六度とは、詳しくは六波羅密と云ふ可きなり、然しこれも三學と別なるものにはあらざるなり。波羅密とは到彼岸とて、迷の此の岸より悟りの彼の岸に至るの方法なり。これは八正道の如く、自利のみならず寧ろ利他に重きをなせり。一、布施。布施とは梵語に檀那と云ふ。布施は、シキホドユスの意にして、凡て互に施し合ひ恵み合ひて、衆生は共存するなり。故に人類の本務として相互に布施の行なかる可らず。この布施に、財施と、法施と、無畏施との三種あり。財施とは金品等を施すなり。慈善の意なり法施とは精神の教を施すなり。無畏施とは衆生をして畏れなからしむるなり。二、持戒。戒は梵語に尸羅と云ひ、防非止惡の義なり。即ち衆生の身口意に於いて。非を防ぎ惡を止め行くなり。現行に云ふ操行を正しくし、法律を能く守るなり。

三、忍辱。梵語に羼提と云ひ、辱を忍ぶ、即ち忍耐の意なり。之に二種あり、

一を他不饒益忍、他の利益にならざる事は忍んでなさざるなり。二を安受耐とは人の侮辱を受け少しも瞋恚の心を起さざるなり。されば忍辱は忍ぶからざるに忍び行くの意なり。

四、精進。梵語に毘梨耶と云ふ。精はクワシク、進はス、ムにして、勉勵努力することなり。これに二種あり、一は身の精進。二は心の精進なり。

五、禪定。梵語に禪那と云ひ譯して靜慮と云ふ。心を專一にして散亂せしめぬなり。

六、智慧。梵語に般若と云ふ。乃ち虚妄の分別心を捨て正智見を開らくなり。

以上、此の六つは迷界より悟界に渡る舟筏にして、衆生をして彼岸に至らしむるなり。

却説此の六度に對する六蔽を説けり。即ち慳貪。破戒。瞋恚。懈怠。散亂。愚痴なり。

この六蔽は、菩提心を蔽ふ迷ひの雲にして貪、瞋、痴の三毒の迷ひの根本なり而して三毒は我見より生ずれば、一切罪惡の根本は我見なり。

第五節 六羅漢

阿若憍陳如等、四諦、三轉法輪を授かりて沙門とならん事を請ふ、釋尊、即ち

善來比丘と許可す。五人の鬚髮自ら落ちて袈裟身に着せり。而して更らに人身は五蘊にして、無常。苦。空。無我なる道理、及び十二因縁の説法を聞きて、煩惱を滅して阿羅漢(無學)果を證成せり。是に於て佛教始めて六羅漢(釋尊と共に)あり、僧伽(衆和合)の團體全くなりて三寶即ち具備す。

第六節 三寶

- 一、佛寶。教主釋尊。
 - 二、法寶。四諦等の教法。
 - 三、僧寶。五比丘等の諸羅漢。
- 此の三寶は一切衆生の善根の苗種を扶植すべき、良福田として佛教入門式には必ず歸依佛。歸依法。歸依僧。の三歸戒を授くなり。

第七節 五蘊

五蘊とは、梵語に塞建陀、五陰。又は五衆と云ふ。蘊とは聚めの義。即ち同種類を蒐集し分類する謂にして、色受想行識是れなり。概説すれば色蘊は肉體を指し、餘の四蘊は精神上の分類なり。

一、色蘊。質碍を有する物を凡て色と云ふ、即ち眼耳鼻舌身の五根(即ち五官)、色(色及び形状)聲香味觸の五境、及び表業(動作)此れ也、此等諸物質を即

ち色蘊と名く。

- 二、受蘊。苦、樂、捨、(非苦非樂)を感覺領受するを即ち受蘊と名く。
- 三、想蘊。事物を想像し、之に名稱を與ふるを即ち想蘊と名く。
- 四、行蘊。色受想の三種を除き、其他の心識上に現るゝ、凡ての状態を即ち行蘊と名く。

五、識蘊。眼、耳、鼻、舌、身、意、六種の心體を即ち識蘊と名く。

人身は即ち此五蘊の集合せる假りの和合體なり。既に假和合體なれば、必ず解散せざるべからず。唯業力に由り五蘊聚集して人身生じ、五蘊離散して空に歸す。之を五蘊聚集の人身の理となすなり。

第八節 十二因縁

人身の生滅は、十二因縁に由て循環流轉して、常に停止することなし。十二因縁とは。

- 一、無明。二、行。三、識。四、名色。五、六入。六、觸。七、受。八、愛。
- 九、取。十、有。十一、生。十二、老死。なり。

無名とは一切煩惱の根本にして生死の源流となり、吾等識體を母體に托して出體し幼年より青年、壯年を経て老境に至り、衰滅する次第を述べしなり。

更らに此等十二因縁の生死をは攝約すれば惑業苦の三道となるなり。

第九節 惑業苦の三道

- 一、惑。身心を惑亂する所の一切煩惱なり。十二因縁中の無名、愛、取の三種之に屬すなり。
 - 二、業。煩惱に發作せらるゝ惡作業なり。十二因縁中の行、有、の二種之れに屬すなり。
 - 三、苦。業力に由て結生したる生死の果報なり。十二因縁中の識、名色、六入觸、受、及び生、老死の七種之に屬すなり。
- 業力に由て生死の果報を感得するに四種の遲速差別あり。

第十節 業力所感の四別

- 一、順現業。現在の業力、直に現果を感生するなり。
 - 二、順次業。現在の業力、未來に至て其果を生ずるなり。
 - 三、順後業。現在の業力、未來の一生を隔て第三生に至て始めて其果を生ずる也。
 - 四、順不定業。感果上の時間に定限なきなり。
- 又業力の主要なる全體を生ずるを引業と名け、更らに男女、智愚、貧富強弱等の

の細別を、生ずるを滿業と稱す。

第十一節 耶舍等の得度

釋尊は、阿若憍陳如等を濟度せし年の夏期中は五羅漢と共に、鹿野園に結夏安居せり。「結夏安居とは、印度の氣候は、四月より七月に至り、雨期に屬し河水氾濫して行化に適せず、又昆蟲類發生期に際すれば。之を踏殺せん事を恐れて殊に外出を忌み乃ち四月十五日より、七月十四日に至る。一夏九旬間は。適宜の地に參集して、修禪觀法を行ひ、教法の研究に従事するなり、之を結夏安居と稱す」。

五比丘得度の翌年、波羅奈城の長者の一子耶舍と云へる者、出家得度して阿羅漢果を得たり。又其の父及び母家族等は、三歸戒を受けて、在家信徒となれり。之を佛教最初の優婆塞(信士)優婆夷(信女)とす。耶舍の得度に尋で、其知友五十人も亦俱に出家得度して、阿羅漢果を證得せり。是に於て、僧寶の一團は頓に増加して五十六羅漢となれり。釋尊、此等の諸比丘に告て曰く。「汝等已に阿羅漢を成す、宜ろしく遊方して以て衆生を教化すべし」と。即ち四方に分派して佛教弘通に従事せむ。

第十二節 三迦葉の歸佛

釋尊、諸比丘に別れて後獨り鹿野園を去て、摩揭陀國に發向せり。日暮の頃、尼連禪河の邊に到着し、此の夜優樓頻螺迦葉の家に寄宿す。優樓頻螺迦葉は、事火外道の宗徒にして、五百人の門弟を有せり。釋尊、即ち事火教の邪道なる旨を教へて彼れの爲に三歸戒を授けたり、彼れ漸く悔悟の念を生じ、翻然自宗を捨て佛教に歸し、其門第五百人と共に沙門となれり。而して四諦八正道の説法を聞き、漸次阿羅漢を成じ、事火の要具の既に全く不用に歸したれば、悉く之を尼連禪河に投棄せり。優樓頻螺迦葉に二弟あり、一を那提迦葉と云ひ、一を迦耶葉と稱す。

二人各二百五十人の門弟を所用し、共に尼連禪河の下流にありて、亦事火教を行へり。偶々上流より兄の火具流れ來るを見て大いに怪しむ、即ち行て兄に問はんとせしに、兄已に佛に歸して沙門と成れるにより、二弟もまた其の門弟と共に沙門となりて、阿羅漢果を成じたり。是に於てか佛弟子新に一千有餘の羅漢を増加せり。

第十三節 竹林精舍

釋尊、即ち此等一千有餘の新比丘を従へて王舍城(城摩揭陀の國都)に到り、頻婆娑羅王の爲めに説法す。王はもと尼乾子外道の信徒なりしが、今釋尊の説ける

三法印の義を聞きて、翻然佛門に歸依せり。王舍城の富豪にして迦蘭陀長者と云へるものあり、これ亦尼乾子外道の信者にして、曩に其所有の大竹林も尼乾子に施したりしが、今や佛説三法印を領解して佛門に歸し、尼乾子を放逐して、竹園に精舍を建立し、以て之を釋尊に寄附せり。之を迦蘭陀竹園精舍と號す。これ僧伽藍(僧園)の嚆矢なり。而して頻婆娑羅王及び、迦蘭陀長者は、佛教信者として常に衣食の資具を、竹園精舍に貢ぎたり。之れ即ち檀越の起源とす。

第十四節 精舍の教化

釋尊、竹園精舍に在して教誡を開くや、老若男女の來りて教を乞ふ者甚だ多く恰も潮の朝奏するが如き盛觀を呈したり。當時王舍城に二人の俊才あり、其の一人の名を舍利弗と云ひ、智辯才能を以て稱せられ。他の一人を目犍連と名け、神通奇行を以て推さる。而して二人とも、外道の教徒にして、各々一百の門弟を有せり。舍利弗、一日外遊して、一比丘の佛教の偈頌を誦するを聞き、大いに感動し、歸りて之を親友、目犍連に談ず、目犍連も亦其感を同ふし、自ら佛教の卓絶なるを知りたれば、即ち兩人相携へて竹園精舍に請り、出家入道して阿羅漢果を證し、更らに其の門弟の爲に、四諦十二因縁の妙理を講説し、二百の門弟もまた阿羅漢果を證したりき。此に於てか、僧園の員數は更らに増加

して、總數一千二百五十有餘の羅漢あるに至れり。就中舍利弗は智慧第一を以つて顯はれ、目連健は神通第一を以つて顯はる。又博學高德の一婆羅門あり、其の姓を迦葉と稱す。家巨萬の富を積みて、福裕天下に冠絶すと稱せらる。曾て家を捨て山に入りて、自ら鬚髮を剃除し、無師獨修、以て道を求めつゝありしが、竹園精舎に到りて、佛説を聞き即ち得度して、阿羅漢果を證したり。而して迦葉は、諸比丘中最も徳者なりければ、他の迦葉姓の諸比丘に別して、之を大迦葉と呼びたり。大迦葉は、其性少欲知足を樂しむ、常に頭陀行を好みしかば、頭陀第一の號を得たり。

第十五節 十二頭陀行

頭陀の行に十二種あり、之れを十二頭陀と云ふ。
 一、阿陳若(閑靜處)。二、常乞食(餘財を畜へず)。三、衲衣(粗布)。四、一坐食(一日一食)。五、節量食(飽食せず)。六、午後不飲漿(非時不飲食)。七、塚間住。八、樹下坐。九、露地住。十、常住不斷。十一、次第乞食。十二、但三衣(大衣、七條五條)。千數百の諸比丘中に於て、大弟子と稱するもの十人あり。大迦葉は其の一人にして、特に仕法の上足として釋尊に畏敬せられたり。十大弟

子の名を次に記すべし。

- | | |
|-------------|--------------|
| 1 大迦葉(頭陀第一) | 2 舍利弗(智慧第一) |
| 3 目健連(神通第一) | 4 阿那律(天眼第一) |
| 5 須菩提(解空第一) | 6 富樓那(說法第一) |
| 7 迦旃延(論議第一) | 8 優婆利(特律第一) |
| 9 羅睺羅(密行第一) | 10 阿難陀(多聞第一) |

此弟子は各其特長を發得して佛敎弘通に大功を顯せし人なり。

第十六節 祇園精舎

舍衛國波斯匿王の臣下に須達と云へる長者あり、家豪富にして、常に孤獨の貧者に給施するを好み、因て給孤獨の名あり。曾て王舎城に行き、四諦の説法を聞きて其の理を領解し、優婆塞の一人なりしが、尙を郷人をして、普く佛恩に浴せしめんとし、舍利弗を伴ひ還りて精舎建立の地を相せしめしが、波斯匿王の太子祇陀の園林、應に好適の地なるを發見せり。

須達、乃ち佛陀の爲めに之を買得せん事を祇陀に乞ふ、祇陀曰く、
 『卿は天下の富豪なり、之を得んと欲せば宜ろしく黄金を以て全園を覆べし、若し少隙を餘すあらば即ち與へず』と。須達之を快諾し、乃ち象背により金貨

を運搬し、之を布列して須臾に其の八十頃を填充したり。

祇陀太子、之を見ろ以爲らく「佛は必らず大徳ならん、能く斯の人をして財を輕んずる此の如くならしむ」と。

即ち之を停止せしめて曰く「園地は卿に屬し、樹林は我れに屬す」と。自ら須達と共同して大いに精舎を造營し、佛の爲めに寶窟を作り、別に僧房一千二百室を設けたり。精舎の新築落成を告ぐるや佛僧の移錫を請ひて大いに外護に盡瘁せり。斯の伽藍は、祇陀、須達、二人共同の營築に成るを以て、之を名けて祇樹給孤獨園精舎と稱號せり。これ釋尊成道後第四年の時なりき。

第十七節 佛弟子の制戒

かくて精舎成り、僧寶の一團體なるや、初めは能く和合して一人の違反者あらずりしが、僧員の増加するに隨ひ諸比丘中往々、不滿の念を懷くもの起りたれば、釋尊即ち諸佛通戒の偈を説て之を鎮靜せり。即ち頌に曰く。

「諸惡莫作。衆善奉行。自淨其意。是諸佛法。」即ち以て大本として、僧團を組織し來りしが、其後釋尊の王舍城に在りし時、檀尼迦と云へる一比丘、草廬を結んで坐禪してありしに、人の爲に之を持ち去られたれば、檀尼迦は陶器師の子にして、陶術を知れるを以て、私かに陶土を盗み來りて之を瓦に制し、完全なる

瓦屋を築造せり。

釋尊、一見して修禪に適せずとして、之を破壊せしめ、且つ其用材の出處を明かにして盜品なるを知り、呵責して將來を誡しめ、茲に始めて偷盜戒を制したり。

又時に毘舍離國にありて身不淨觀を説き、諸比丘をして習定せしめに拘はらず、其習定者の一人なる、難提比丘は、他の雇命を受けて、殺人罪を犯せしかば、即ち殺生戒を制定せり。又一年凶饑にして米穀實らず、乞食の容易に行ひ難かりければ、婆求と云へる一比丘は、其の同志中に有徳者有りと詐り、信者を瞞着して多くの施物を貪り獨り之を私消す。後に之を釋尊に自白せしかば、呵責教誡して即ち妄語戒を制せり。又斯の惡比丘、婆求は其貪り貯へたる財貨を散トて美酒佳肴に飽き、一日一食の佛制を破りしかば茲に又飲酒戒を制せり。又釋尊の毘舍離國に在りし時、須提比丘、出家の後數年を経て父母の勸誘に従ひ、家に歸りて其の妻と同棲し、一子を擧げて後再び僧園に歸れり。後に諸比丘の知る所となり。之を釋尊に告げしを以て、大衆の面前に之を呵責して、即ち邪淫戒を制せり。之に依りて即ち五戒の制備はるに至れり。

- 五 戒
- 1 不殺生
 - 2 不偷盜
 - 3 不邪淫
 - 4 不妄語
 - 5 不飲酒

佛教の戒律は右の如く、隨犯隨制して成り、而して漸く其の條目を追加して、遂に二百五十條の戒法を備ふる至れり。此等の戒法を名けて、波羅提木叉（別解脱戒）と稱す。即ち其條目に照らして各別に犯罪を解脱するなり。又之を具足大戒と稱す。

而して能く之を守持する者を大比丘僧と號す、比丘（苾芻）は元來草の名なり、僧の五徳能く比丘草の五義に比すべきものあるを以て、即ち比丘と稱するなり。

- 比丘五徳
- 1 怖魔
 - 2 傳法
 - 3 持戒
 - 4 斷惑
 - 5 信仰
 - 1 體性柔軟
 - 2 引蔓旁布
 - 3 馨香遠聞
 - 4 能療疼痛
 - 5 不背日光
- 比比丘草五義

又出家初學の弟子を沙彌（求寂）と稱す。己達の大比丘に近住して、寂靜涅槃の道を求むるなり。沙彌に十戒あり、之を求寂戒と名くなり。

- 沙彌求寂戒
- 1 不殺生
 - 2 不偷盜
 - 3 不邪淫
 - 4 不妄語
 - 5 不飯酒
 - 6 離高廣大床
 - 7 離華蔓等
 - 8 離歌舞等
 - 9 離金寶等
 - 10 離非時食

此等各種の戒律を綜括して之を三聚淨戒と稱す。

- 1 別解脱戒
- 2 生善法戒
- 3 饒益有情戒

第六章 釋迦氏一族の教化

第一節 父王教化

釋尊、求道後既に六年、說法教化に奔走して未だ生國に歸る違あらざりしかば父淨飯王は太子已に成佛せりと聞き、これを見んとの念茲に久し、乃ち梵志優陀耶を遣はし意を傳へて曰く。

『別潤以來既に十二年我一見を欲する情切なり』と。釋尊即ち歸國の旨を報せしむ。淨飯王報を得て、大いに歡び、盛儀を飾りて、自ら十數里外に迎接す。太子歸城の報を傳聞して故舊等の參集するもの緒の如く、沿道至る處人垣を築くの壯觀を呈せり。而して釋尊は、唯三衣一鉢の一比丘となりて、顔貌憔悴膚色

灰黒其の姿の甚た擧らざるを見て、一族故舊の輩は歡迎の盛儀と均衡を得ざるを耻として、俄かに城内の豪族等と謀り、五百人を抜摘して、沙門に扮装せしめ、之を釋尊の前後左右に陪從せしめて王宮に迎へ入れたり。釋尊之を悦ばず、即ち諸人の爲に諸行は無常にして榮華は浮雲の如く、恃むに足らず、出離解脫は人生の最大要義なりとの理を説き、自ら垢衣粗食以て衆生濟度を其の天職と爲すの趣意を示せしかば、一坐大に感動して即時に出家を乞ふもの甚た多かりき。

父王は耶輸陀羅、并に釋尊出家以前の一子羅睺羅を從へて接見せり、釋尊爲めに人生の本末因縁及び怨親平等の理を説きて、恩愛の情を除かしめたり。

第二節 阿那律の得度

釋尊の説法に感激して、陸續出家を請ふものある中に、斛飯王の次子阿那律。白飯王の長子提婆達多。釋尊の異母弟難陀。甘露飯王の次子跋提。及び難提等の諸公子。相携へて出家せり。其の出家の日、自ら寶衣を脱して、侍僕優波離に與へて曰く、「汝は我等に依りて存活せり、今此の衣を以て汝の資生に與ふ」と。優波離これを屑とせずして、同トく亦出家し、其の寶衣を樹上に掛けて共に佛所に詣れり。阿那律之を惡み、其の驕慢を除かしめん爲めに、釋尊に乞ひて

先づ優波離を度せしめ、序次に從つて授戒し、難陀に至る。難陀、已度の諸比丘に作禮して、優波離の前に至り、其賤族奴隸なりし故を以て、之を禮するを肯せず、釋尊乃ち説て曰く「四大河海に入り異名なし、四姓出家して同トく釋氏と稱す。海水同一鹹味なるが如く、佛門に入るものは貴賤貧富の別なく、皆一味平等の法樂を享く可し。但受戒の前後を以て坐を定む」と。又提婆達多に語て曰く「汝は宜しく、家に在て惠施を行ふ可し、亦出家すべからず」と。懇に語り得度を許さず。提婆達多、惡念を起して謂へらく、「此沙門妬心あり我宜しく剃頭して善く梵行を修すべし」と。是より大に釋尊を敵視し、屢々危害を加へんとせしことありき。この年凶賊殃掘摩羅、前非を悔て出家得度す。提婆達多の弟阿難陀は、釋尊成道の日に於て生る、此時年八歳にして出家し、羯磨法により具足戒を受けたり。

第三節 女人得度

釋尊、迦毘羅衛城を辭し去て、後二年にして再び歸省し、父王の病を問ひ聖道を説法す。この時一族親戚者の出家得度を請ふもの頗る多く、男子の大班は皆比丘と成るに至れり。

是より先き、釋尊始めて歸省せし時、姨母摩訶婆闍婆提、切りに出家を請ひし

も、其女人たるの故を以て、未だ之を許さざりしが、今再び歸省するにあたり尙ほ再三之を請ふて止まず。茲に於て先づ八敬戒を授けて、得度を許せり。即ち比丘尼の始めとす。

八敬戒

- 1 比丘を罵詈するを得ず
- 2 比丘の罪過を擧ぐるを得ず
- 3 僧に從て大戒を受く
- 4 自ら過失あれば僧に從て懺悔す
- 5 半月間僧の教誡を受く
- 6 僧に從ひて三ヶ月間安居す
- 7 結夏訖りて僧に從て自恣す
- 8 百歳の尼尙は初夏の比丘を禮す

姨母出家に次て、耶輸陀羅も亦出家して、比丘尼となれり。是より以後女子の出家するもの亦少からざりき。而して比丘尼犯戒の相は、比丘僧に同トからざるものあり、即ち隨犯隨制して遂に五百戒を備ふるに至れり。是の時に於て佛門の教徒其類別四部衆を有せり。

四部衆

- 1 比丘(男僧)
 - 2 比丘尼(女僧)
 - 3 優婆塞(信士)
 - 4 優婆夷(信女)
- 第四節 小乗の徒

釋尊、成道十二年間は、遂機の方便を以て、或は鹿園に、或は竹園に、又は祇園に、外道の邪見を破し、佛教の正理を顯はすを旨とし、應病與藥の法門を施して、専ら自調自度を勸奨したり。而かも機根不同にして修行の法亦一定するを得ず、即ち行者は自然に聲聞、緣覺の二乘をなすに至れり。

1 聲聞。只管、師説を聞き、師の教へを受けて、三學を研修し、多人共同して以て、自ら出世無漏道に進み行くを即ち、聲聞乘と名く、其學道は四聖諦を以て根本義となす。

2 緣覺。又は獨覺と名く。根機稍々銳利にして、師授を俟たず、共同部行を藉らず、單身獨行以て深山幽谷に坐禪し、飛華落葉を觀ト、十二因緣の理を冥想し、斯くして、無師自悟、自ら聖道に進み行くを、即ち緣覺又は獨覺乘と名く、其學道は十二因緣觀を以て大本となす。

聲聞緣覺の二乘は、各其所修を異にすれども、同トく自行自度にして、利他の行なきを以て合して之を小乗と稱す。

釋尊は、二乗の自度の小行は單に自利の一邊に偏り、未だ以て中道の正理に適合せず。是を以て成道十三年以後に於ては、機根の漸く、成熟するを鑑み、自利利他兼濟の大乗の道を説きたり。而かも尙ほ機根の混同を免れざるを以て、初めは大小乗を互説並陳せしが、其晩年にありては、多く摩揭陀國靈鷲山に住して、専ら大乘中道の正理を開顯したり。

其の大乗行者を名けて、菩提薩埵摩訶薩埵(大覺有情者)と稱す。菩薩大乗行者は、自ら菩提心(大覺を求むる心)を發揮し、四無量心を以て四弘誓願に住し、六波羅密(即六度)を修行して、阿耨多羅三藐三菩提(無上正等正覺)を證得するなり。

第七章 釋尊最後の教化

第一節 十二分經

釋尊、年既に六十歳、自ら漸く老衰せしを覺知し、一日、諸比丘を王舎城に集め、之に告て曰く『誰か我が爲めに、十二分經を受持して、我に給仕するの任に堪へん』と。阿若憍陳如進み出て曰く、『我能く此任に奉仕せん』と。釋尊曰く『汝已に朽邁せり、何ぞ給仕に堪へ得べけんや』と、

大衆、皆阿難陀を推舉す。阿難曰く、『我に三事の願望あり、第一、如來の古衣を受けず。第二、如來に隨喜して別請を受けず。第三、我が爲めに出入の制限を寛にす。此三事の許可を得て然る後命に従はん』と。釋尊曰く、『善哉阿難の志や、若し我古衣を着し、又別請に隨從せば、人或は衣食の爲に佛に待すと謂はん、又若し出入を嚴にせば、普利衆生の行を防げん、我阿難の爲めに此の三事を許す』と。

阿難、時に年方に三十歳、爾來佛入滅に至る迄、其の左右に待する前後三十年間、佛説は皆聽受して、更に遺すなく、十二分經悉く憶持して、毫も忘失する所なかりき、是れ其の多聞第一の稱ある所以なり。

第二節 釋尊最後の教化

釋尊、成道してより殆んど既に五十年、周行遊化して足跡の達する處、實に恒河沿岸一帯に及び、人天を化度すること其の數無量なりき。而して其の諸弟子中には、或は王公貴族あり、或は奴隸賤族あり、甚たらきに至りては、殃掘摩羅比丘の如き、兇賊の改悛者あり、摩登伽比丘尼の如き媚婦の發心者ありて、其一旦佛門に歸するや、平等一味の法樂に浴するを得て、種族的階級の壓仰より逃るゝを得たり、釋尊の眼中固より四姓なく、唯塗炭の苦より衆生を救濟す

るを、正に其本懐となせしなり。されば人天の大導師大恩主として到る處に於て、恭敬供養を受けざるなく、一化五十年間の説法は、印度人心をして根定より全く改造せしめたりき。

斯くて、自ら入滅の時期の漸く迫るを知るや、諸比丘に告げて曰く「却後三ヶ月我當に般涅槃すべし」と。而して更らに最後の化益を施さんとて、自ら老體を助けて巡化の途に上りたり。

時に拘睢彌國の優填王は永別を惜みて、追慕の意を表せんが爲に、丈五尺の木佛像を彫刻せり。舍衛國の波斯匿王、之を聞いて亦丈五尺の金像を鑄造す。

釋尊は曾て、王の爲めに仁王(仁王經)の道を説き、治國の要を説きたることありき。又初め王舍城を發して巡化の途に就くや、當時阿闍世王の築ける波吒釐子城を通過し、將來此の地必ず繁華ならんことを豫言せり。

阿闍世王は、頻婆娑羅王の子にして、摩訶陀の國都を、王舍城より即ち此地の波吒釐子に遷せしなり。阿闍世王は曾て太子たりし時、提婆達多と黨を結び、太子は竊かに、父王を害し、代つて自ら天下の大王たる可く、提婆達多は、釋尊を殺して、萬人の崇信を受く可しと約し、而して提婆は屢々釋尊に參害を加へんとして遂げず、終に反て自ら變死せしむ。獨り太子は意の如く、父王を殺

して、王位を奪ふを得たり。されど惡瘡身に發して治せず、名醫良藥も、亦其効を奏する能はざりき。大醫、耆婆曰く「是れ實に業病なり、世醫の能く療する所に非ず、唯世尊如來のみ能く之を治せん」と。阿闍世王も自ら亦其大逆を犯したる報果にあらざるなきやを竊かに恐れ、罪障消滅の道を聞かんと欲して佛所に詣りしむ、釋尊は已に去て、拘尸那國に巡錫せりと聞き、即ち其巡錫地に行きて説法教化を受け、亦佛教篤信者の一人とはなりたり。

第三節 須跋多羅の教化

拘尸那城の工匠の一子に、純陀と云へる者あり、一日佛僧を其家に屈請し濟食を供養す、釋尊之を受けて純陀一家の爲に三法印を説法し、無量の法益を施して辭し去り、跋提河を渡りて娑羅(堅固)樹林に達せし時、腹痛俄かに發して歩行する能はず、苦痛を忍びて雙樹の下に停錫す。當時、舍利弗、目犍連は、相前後して釋尊に先たちて没し、又大弟子中早く既に死滅せしものも少からず。而して付法上足の大迦葉は遠く靈鷲山に在り、其他比丘の多數は各地に散在して各自佛教弘道に従事しつゝあり。

今や其左右に隨侍するものは、唯阿難一人のみなりき。阿難釋尊の容體を見て大いに驚き、以て之を諸人に報ず。變を聞きて遠近より參集するもの凡て五十

二衆、交々看護に奔走するも、漸次重症に陥るのみ。純陀自らも亦切に謝罪辨疏す、釋尊之を諭して曰く「南無純陀、人身にして其心佛心に同ト、我當に滅度せんと欲す、而して最後の食を我れに供養す、功德無比なり、當來世の時必ず成佛すべし」と。即ち純陀の功を賞して、大衆の疑念を氷解せしめたり。又大衆中に須跋多羅と云へる一梵志あり、年已に一百二十歳の老翁にして、尙外道の邪見を捨てざりしが、釋尊の今將に、滅度を告げんとするを聞きて最後の說法を請ひ、忽ち漏盡意解して、即ち阿羅漢果を證せり。而して佛の滅度を俟たずして即ち入滅す、之れを最終の佛弟子とす。

第四節 釋尊入滅

釋尊大衆に告げて曰く「我成道以來茲に五十年、初め阿若憍陳如を度してより、最後の須跋多羅に至る、其中間化度する所亦計量すべからず、我事究竟す復施作すべきなし」と。更らに告げて曰く「我今將に涅槃に入らんとす、若し法に於て疑惑あらんものは宜ろしく、今最後の問をなすべし」と。大衆嗚咽悲泣して、只管寶壽の長久ならん事を祈るのみ。夜半に至り滅後に於ける法要を説き訖て、寂然として聲なし、良久して又告げて曰く「汝等比丘我滅後當に波羅提木叉を尊重すべし、當に知る可し戒は是れ汝等の大師なり、若我れ世に住するも此れ

と異なるなし」と。遺誠已に訖て、右脇にして安臥し、頭北面西寂然として般涅槃す。時に成道後、第五十年の二月十五日夜半にして、聖壽正に八十歳なりき。娑婆羅雙樹は、四時不變の鬱蒼たる喬木なりしが、釋尊入涅槃の後、枝葉俄かに凋落して白色を呈し、宛も白鶴の如くに一變せしかば、世人之を名けて鶴林と稱したり。

佛陀已に涅槃に入りたれば、大衆の悲哀號泣の聲は、一時に迸發して、天地も爲に震はんばかりなりき。斯くて追慕の情竭くるの期、なれば、諸弟子等、悲硬しつゝ共に遺身を扶けて金棺に安置し、拘尸那城の民衆より捧げし、香華幡蓋を飾りて、一旦城中に入り西門より入て、東門に出で、南門を入て北門より出で、城を遶て七返し徐行して荼毘(焚燒)所に着し、金棺を供養すること、一週日にして火葬せり。

當時大迦葉は、五百の弟子と共に靈鷲山に在りて、未だ佛涅槃を知らざりしが偶々一梵志の時華を手にして過ぐるに逢ひ、迦葉これに問ふて曰く「其華何れに持ち去らんとするや」。梵志答て曰く「佛入滅して已に七日を経たり、我亦之を供養せんとす」。迦葉、大に驚き晝夜兼行して荼毘所に達せし時は、將に香木を積み、香油を灌ぎて、金棺に點火せんとする時なりき。迦葉即ち偈を誦し、

更らに香油を灌ぎて自ら火を點す。棺内火を噴き出して、香樓即ち燒燼せり。嗚呼、人天の大師衆生の恩主たる、大聖釋迦牟尼如來は、茲に空しく荼毘一片の煙と化して、唯數斛の舍利(骨灰)を遺留するのみ。四部の諸弟子は、宛も闇夜に燈火を失へるが如く、再び佛光を拜するの期なきを悲みたり。されど滅後の餘光は、永く消滅することなく、三千載の後、尙ほ赫灼として衆生の迷途を照らしつゝあるなり。

第五節 佛舎利の分與

釋尊荼毘の後、又七日を経て金棺を開らき、全く一身舎利を收めて金瓶に盛り拘尸那城に安置して更らに一週日之を供養せり。其の週の終り即ち三月六日に至り、迦毘羅衛國王(釋迦族の後を承けたる異姓の王統)自ら佛本生國の緣故を以て、佛舎利を迎ひ取らんことを請求す。されど拘尸王は、其の領土に留めたる舎利なれば、一步たも國外に出すを許さずと遮絶せり。

摩揭陀國の阿闍世王も、之を求めて亦遮絶せられ。其の他舍衛國。波羅奈國。拘睢彌國。藍摩國。毘舍離國等の曾て、佛縁を結びし諸王も各之を請ふて亦斥けられる。

是に於てか優波吉と云へる、一大臣荐りに之が調停を試みしも功なし。拘尸那

城の波羅門徒、羅那の仲裁にて、其の佛縁に依れる八國に分與し事なきを得たり。

佛舎利を得たる國王は喜びて各本國に卒塔婆(表影塔)を建設し、之を供養せたり。此の一事を以ても釋尊の教化の偉大なりしを追想すべし。

『備考、佛滅後二百年の頃に至り阿育王出て、印度の全土及び其の附近を統一するや、其八塔を發掘して、更に八萬四千個に再分し、即ち八萬四千塔を興して其領土全般に分置し、以て佛恩の余澤を普及せりと云ふ。』

第八章 釋尊入滅後の佛教

第一節 佛典第一結集

釋尊、入滅後に於ける、第一重要事件は、遺教の結集なり。元來釋尊の教化は凡夫に對する應病與藥なるが故に、機類に従つて法を説かれしを、佛弟子等は服膺し、暗記せしのみにて、別に録せしものにはあらざるなり。今や釋尊、入滅後大衆を統率すべき重任ある、大迦葉は長く佛弟子の指導となり、教權となるべき、遺教結集の必要を認めしより、佛滅後第一兩安居の時に於て、王舍城に近き、畢波羅窟内(或は七葉窟とも云ふ)にて久しく佛に隨待せし、阿難が誦出者となり、『如是我聞』と。佛説を述べ、經藏を誦出し。又律藏は優婆離により

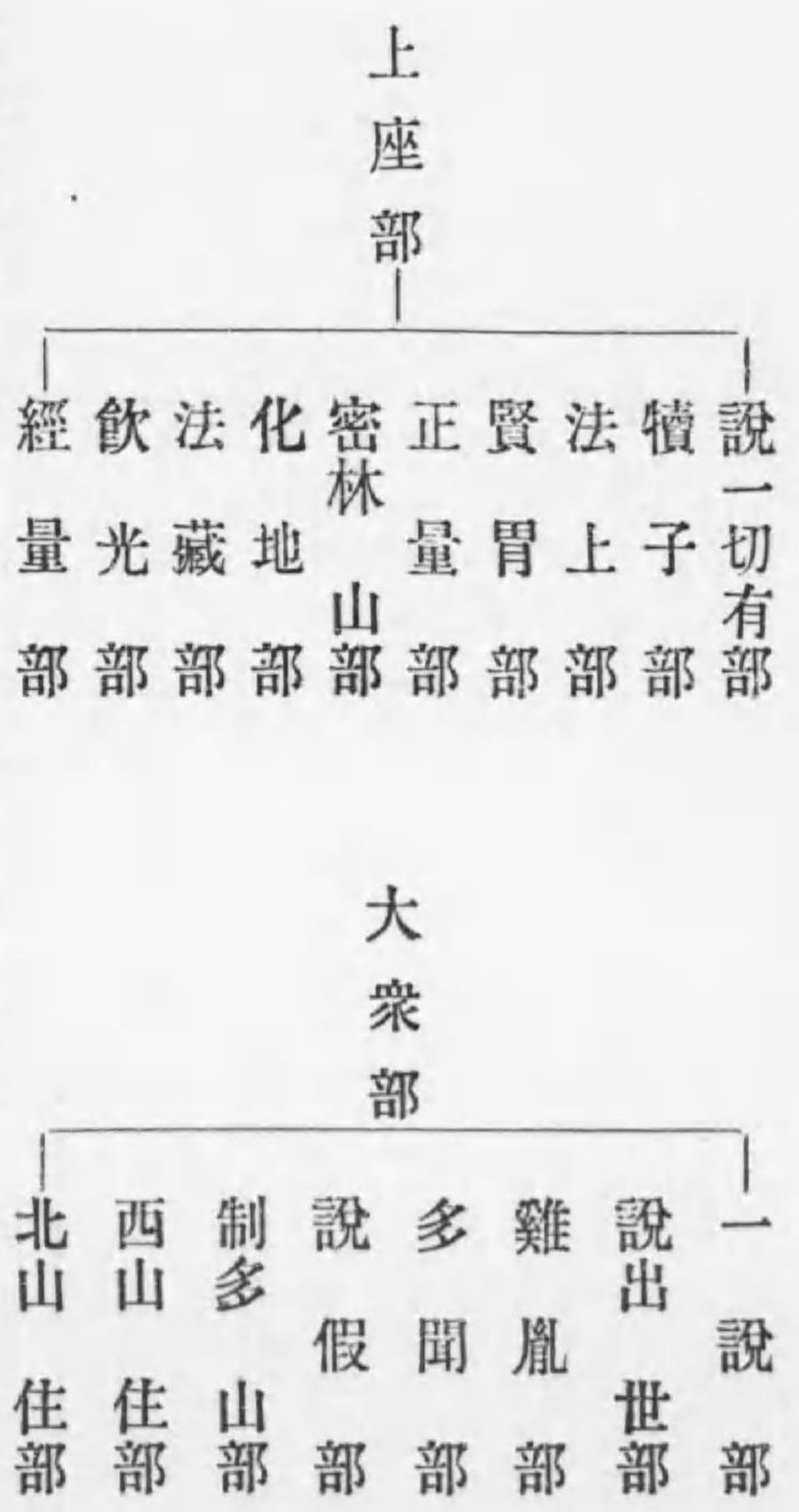
誦出されたり。之れ第一結集にして、之を窟内結集と云ふ。此の結果は、大迦葉上首となりて、佛弟子中五百人を撰出せしものにて、此の撰に漏れし佛弟子は又別集で別種の結果をなせり。之を窟外結集と云ふ。

第二節 佛典第二結集

此の如く、佛説結集に於て、當時窟内、窟外の二派に分れたるも、滅後百年の頃迄は大なる諍論もなかりき。

百年の時に及び、毘舍離國にて律の上に異義を生じ、七百年の佛弟子集りて結集を行へり、之を第二結集と云ふ。當時大天なる佛弟子に五事を以て、佛説の眞實とし、自由主義を取りこれ大衆部にして、即ち窟外結集の教系なり。然るに滅後二百年の頃に至りては、大衆部は分裂して八部となれり。此の大天の紛擾の爲めに、北天竺迦濕彌羅國の方に移住せし佛弟子は、窟内結集の教系にして、佛敎正統派なり、此を上座部と云ふ。此の上座部も亦滅後四百年代に至りて十部に分れたり。

上座部(窟内)本來合して十一部。大衆部(窟外)本來合して九部。



上座部大衆部合して二十の多きに分裂し、之を小乗二十部と云ふなり。佛滅後二百年代に有名なる阿育王現はれて、佛法弘通に力を盡し、學徳高き僧侶を撰抜して、之を布教師として世界傳導を試み、西は歐羅巴亞弗利加、南は錫崙、東は緬甸、馬來、北はバクトリヤに至る迄で教線を擴張し、佛成道の聖地に於ける菩提を供養し、八萬四千の寶塔を建て、佛舍利を分置せり。後に目健連子等の勸めにより、第三回の結集を行ひ、佛敎の勢力は實に盛んなりき、

287
523

佛滅後六百年代に、北印度に伽膩色迦王起り、四方を征服し、終に中印度を征し、大に佛法を興隆せり。此の時脇比丘を上首として、五百の僧侶を其領内の加濕彌羅に集め、結集を行ひ、盛んに佛法に力を盡されたり。之れを第四詣集と云ふ。
印度の佛教は、實に前に阿育王あり。後に伽膩色迦王ありて益々隆盛を極めたり。

大正十二年四月十五日印刷
大正十二年四月二十日發行

【釋迦傳奥附】

不許複製

編輯者 京都府葛野郡花園村 小 林 禪 友
發行所 京都府葛野郡花園村 中 學
印刷者 京都市上京區木屋町二條 河 野 義 三

終

